

「共生社会」について思うこと

今年2月に滋賀県で行われたアメニティーフォーラム17に参加した。その講師陣の中に細川佳代子さんがいらっしやった。細川佳代子さんは公益財団法人「スペシャルオリンピックス日本」の名誉会長・NPO法人「勇気の翼インクルージョン2015」理事長といった肩書きの方にも関わらずとても素朴で優しさがある方だった。

講演の中身はスペシャルオリンピックスの活動やその設立のいきさつだった。スペシャルオリンピックスはナンバー1にならずともオンリー1をめざそうということで、選手本人がそれぞれ一生懸命にやり遂げる姿に拍手を送りながら、選手たちが100%の力をだせるように援助し選手が満足できるようにチャンスを提供し支援しているとの話に新たな感動があった。

現代の世の中は経過より結果が求められがちである。しかし、スペシャルオリンピックスは楽しく一生懸命にスポーツに励み昨日の自分自身に今日は勝つことを目標にしようという理念が素晴らしいところだと思った。

残念ながらマスメディアがこういった報道を大々的に取り上げようとはしないので世間ではあまり知られていないという現状にある。そして、いわゆる健常者と障害者の間が隔てられ健常者の世界、障害者の世界というように分かれているようだ。

なぜ、このように別々の世界になってしまっているのだろうか。障害の重い人は小さいうちから特別支援学校に入学することが当たり前になっており、近所の子どもと一緒に地元の学校に通えていないことが多い。仮に地元の小学校に通ったとしても、中学や高等部段階では特別支援学校に入学する。

一方、障害のない人は当然ながら地元の小・中学校に進学するので、子どもの頃から両者は、いわば違う世界で生活している。障害のない人は障害者が怖いという偏見を少なからず持っている。それは当然かもしれない。だって「別の世界」の障害者のことを知らなすぎるのだから。確かに、障害のある人は時として大きな声を出したり突然暴れ出したりすることがないわけではない。それは容易に理解しにくいことで、なぜ暴れたり大きな声を出すのかということ想像したり考えたりもしにくい。なぜなら、障害のない人たちが、自分には関係ない、興味がない関わりたくないと思っているからだろう。

自分自身の小学生の頃を思い浮かべると、1つ下の学年にダウン症の子がいた。当時は単に「鈍くさい奴だな」と思っただけだけれど、それでも一緒に鬼ごっこ等の遊びをして楽しんだこともあった。もちろん、その頃は障害者という言葉も知らずに一緒に遊んでいた。彼にはダウン症という障害があったんだということを大人になって初めて知った。けれども、小さい頃から一緒に遊んでいた彼は今でも友達のように思っている。最近、は遊ぶ機会がないけれど、実家に帰るとたまたま出会ったりするので、挨拶や互いの近況を報告し合ったりしている。

最近、よく共生社会という言葉が聞かれる。共生社会とは、誰にとっても住みやすく楽しく暮らすことができる社会のことを言うが、現在とはとてもそうは言えない。障害に関係なくお互いに歩み寄り、お互いのことを知れば「怖さ」などあり得ないし、別々の世界に暮らすこともないはずだが。

しかし、そういいながら、1人暮らしでアパートに住んでいる自分自身は隣の人さえあまり面識がない。共生社会を語る以上は小さな一歩として、隣人に話しかけ仲良くなりたいと思う。